

令和4年度 特別の教育課程（書道科）の実施状況等について

柏原小学校

1. 本校の教育目標

明るく 正しく たくましく

- 明るく、心豊かな子
- 正しく、実践力のある子
- たくましく、健康な子

2. 特別の教育課程の内容

（1）特別の教育課程の概要

小学校第1～6学年において新教科「書道科」を設ける。第1学年は、国語を30時間、生活科を4時間削減して、第2学年は、国語を30時間、生活科を5時間削減して新教科に充てる。第3～6学年は、国語を30時間、総合的な学習の時間を5時間削減して新教科に充てる。「書道科」において、書を書くという具体的な活動を通し、友だちと触れ合ったり、家庭生活での話題をもたらしたり、地域の人々とのかかわりを生んだりする。そこから、集団の中での自分の役割や行動の仕方を考えさせるとともに、「書のまち」に生きるよさと愛着をもたせる。

また「書道」という伝統文化や「書のまち」を発信する地域の特性を探究する活動にも取り組むことを通して、表現力の向上と向上心の伸長を図るとともに、日本古来の文化や自分の生活する地域を振り返りながら自己の生き方をも考えさせる。

（2）特例の適用期間

平成28年4月1日～令和11年3月31日

（3）実施学年

1年、2年、3年、4年、5年、6年、（特別支援学級 単独でも実施）

（4）地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

本市は、三蹟のひとり小野道風の生誕の地と言われており、全国的にも数少ない書専門の美術館小野道風記念館を有し「書のまち春日井」として、書道の普及発展に力を入れている。特に、小野小学校では、愛知県下児童・生徒席上揮毫大会が昭和11年から戦争中も途切れることなく開催され、第1回からの優秀作品を保管するなど、愛知県の書道教育の中心的な役割を果たしてきている。

書道は「文字を正しく整えて書く」ことにおいて、従前から行われてきた国語科における書写の目的に共通するが、その文化・芸術性及び精神性においては、書写とは一線を引くものである。現在、児童の「表現力の向上」「心の教育の充実」などが重要な教育課題であると認識している。

それらを解決するため、前述した地域性や学校の特色、さらには書道の特性を活かした「書道科」を設け、表現力の向上を目指すとともに、よりよい作品をつくりあげようとする向上心、つくりあげた達成感から得られる自尊感情、相互評価などの他者との関わりから得られる親切心や規範意識等、特に心の充実を図りたいと考える。また、同時に郷土愛についても、書道を通して「書のまち春日井」に根ざして生活している自覚を促し、育てていく。

（５）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

２に記載する特別の教育課程について、教育基本法（平成 18 年法律第 120 号）及び学校教育法（昭和 22 年法律第 26 号）に規定する小学校等の教育の目標に関する規定等に照らして適切であることを、春日井市教育委員会において確認済。

３．特別の教育課程の実施状況に関する評価

（１）評価の観点

- ① 特別の教育課程の編成・実施により、学校の教育目標が十全に達成されているか
- ② 教育課程全体としてバランスのとれた教育活動が実施され、学校教育法に示す学校教育の目標が十全に達成されているか

（２）自己評価

児 童	・ より良い作品にするために、一度自分の書いた字と手本とを比べて、改善点を見つけてから次の作品を書くようにした。 ・ 書の先生に、はらいの力の抜き方を教えてもらった。これまでは、はらうときにかすれていたけれど、力の抜き方を教えてもらったらできるようになった。 ・ 「固形墨を使って小筆で書こう」が心に残っている。初めて固形墨を使って、色の濃さを調整するのが難しかった。いつもは液体の墨を使っているけど、固形墨から墨液をつくって筆で書いたのが新鮮だった。
教 員	・ 夏期休業中の現職研修で、書の講師を招いて研修を行った。基本の筆使いを学んだり、作品づくりをしたりした。児童だけでなく教師も書を楽しみ、書に親しみをもつことで、より充実した学びにつながると考える。 ・ ３～６年生の年間計画を見直し、書講師来校日の単元第１時への設定、尾書研への参加、書を生かした作品づくりの充実などを行った。また、今年度新たに、大きな筆や書初め用の下敷きなどをそろえた。 ・ 他学級、他学年の児童の作品を鑑賞する時間を設定すると、さらによい。
保護者	・ パソコンやスマホを使うことが増え、実際に字を書く時間が減っている。書き順や字形などに気をつけ、ていねいに字を書く時間は大切だと思う。ふだん書く字に、書の時間の学びがもっと生かされるとよい。 ・ 書の学習を参観した。目標設定に時間のかかる子、じっくり書きたい子もいるように感じる。時には２時間続きの書の学習があってもよいのでは。

- ・ 教室の掲示物（授業参観時や懇談時）やホームページから、子ども学びの様子が伝わってくる。画用紙の台紙に貼って仕上げた子どもの書作品は、自宅でも飾ってある。

（３）学校関係者評価

- ・ 書道科の学習を通して、字を正しく学んでいくことが大切である。低学年時から筆、墨、半紙に触れることは、児童の知識や技能だけでなく、感性や思考力も育てていると思う。継続して学び、中学年、高学年、中学生へと学びを発展させてほしい。
- ・ 四国中央市（和紙の生産地）では、書道パフォーマンス甲子園が行われている。市内にも書道パフォーマンスを行う高校がある。高校と連携し、児童がパフォーマンスを鑑賞したり、書を教えてもらったりする機会があると、書道科がさらに盛り上がり継続するのではないかと。
- ・ 書の授業や掲示物を毎年見せていただいている。年々表現力が高まっているように感じる。児童の「書きたい」気持ちを、より高めてほしい。

（４）課題

- ・ ６年間継続指導することで、児童の向上心、書に親しむ心、知識・技能などが高まってきた。しかし、小学校６年間での取組が、どのように中学校につながっていくかを指導者が理解できていない。書道科の分野でも、小中連携の必要がある。